

Title	菩薩の女房
Author(s)	長崎, 広子
Citation	ヒンディー文学. 4 P.5-P.18
Issue Date	2009-08
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/26964
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

菩薩の女房

クリシュナ・バルデーオ・ヴァイド
訳・解説 長崎 広子

むかしむかしある平穏な町に、ひとりの裕福な商人が住んでいたそう。商人には息子が二人いた。兄貴はとても善良で、大人しく、親切だった。こいつは菩薩だ、あの罪深い商人の家にどうして生まれたのやら、と人が言うほどだった。弟も別段悪いわけではなかったが、兄貴とは違っていたので、こいつがああ菩薩の弟のはずがない、と人は言うのだった。実際弟は騒々しく、自己中心的なタイプの若者だった。同じ母乳を飲んで、同じ父親に仕上げられたのに、神さまのお戯れだよ、片やこんなに大人しくて、片やこんなに騒々しい、片やいつも人に尽くしたいと思っっているのに、片や自分勝手に、と人

は驚いた。そもそも世間は他人についてありとあらゆるいい加減なことを言い、勝手な憶測をし、神のお戯れに驚き、驚くふりをするものなので、彼らの話に拘らずに、物語を先に進めよう。

すると、商人の女房がしばらく病気にかかって死んでしまった。そして商人はどこからか別の女房を娶って連れてきた。この女は最初の女房よりかなり小さかった。身長ではなくて、年が若かったという意味だ。そして、とても魅力的だった。性格ではなくて、容姿において。世間は言った。——男なんてまったく信用できないもんだね。とりわけ商人なんて。あの気の毒な嫁さんじゃなくて、このろくでなしの方が死んでいたなら、嫁さんは薪に身を投げて亭主といっしょに自分も死んでいただろうに。そうしなかったとしても、こんなにすぐに再婚なんてするわけがない。死んだ亭主よりもずっと若い亭主なんて、ぜったいに再婚しなかったさ。人は互いに、また勝手にいろんなことを言っ

たが、彼らの話はさておき、物語を先に進めよう。

すると、後妻が来るやいなや、商人は息子たちと言った。——さあ、家から出て行け。わしはお前らの面倒は見んぞ。わしは今度の嫁の言うとおりにしてやる。あいつを贅沢させて、わしも楽しんで、あと二人息子を作るぞ。お前らはここから出て行け。

ここで商人が寸分違わずこう言ったわけではないが、話の趣旨が大体こうであつたことは確かだ。言うまでもないことだが、当時の父親は息子を恐れることなどなかつた。

父の話聞いて弟は暴れたが、兄貴は落ち着き払っていた。弟は父に詰め寄り、世間体や尊厳を引き合いに出して救いを求めたが、兄貴は口を開くこともなく、表情に不平の色さえ見せなかつた。弟はどんな理屈をもつても父の心を変えることはできないと知ると、大きな足音を立てながら、家から出て行つた。その後彼の行方は一向に知れず、弟がこの物語に二度と

登場することはない。一方兄貴は、父の足に触れ、継母に丁寧な挨拶し、自分の女房に言った。

——さあ、森に行こう。

申し訳ない。兄貴が結婚していることをあらかじめ言っておくのを忘れていた。彼の女房については、私ではなく、物語が語ってくれるだろう。

どこか他の町ではなくて、なぜ兄貴は森に向つたのかという疑問がわくかもしれない。当時は都会よりも森が好まれ、菩薩のような人なら町ではなくて森を好むものだという理由が挙げられる。他にも挙げられるが、それは私の仕事ではない。物語を先に進めよう。そうだ、これだけは必ず言っておかなければならない。彼の女房は低い声ではあつたが、夫の選択に当然ながら反対したのだった。なぜなら、彼女には森を徘徊する趣味などなかつたし、もし自分で行き先を選ぶとすれば、絶対に賑やかな町に向つたからだった。

そして、森をさまよううちに二人はついに広

い砂漠にたどり着いた。そこには灼熱の太陽の日差しを遮る木一本なく、熱を帯びた砂を覆う草もなく、乾きを癒す水一滴さえなかつた。太陽の光は赤く熱せられた鉄の棒のようだった。食料はつき、皮袋に入れた水もなくなつた。まゝ一週間二人は砂漠の中を空腹と渇きに苦しみながらさ迷つた。兄貴は自分の身体から肉を切つて女房に食べさせ自分の血を飲ませて、彼女の飢えと乾きを癒しつづけた。まさに世間は

伊達に彼を菩薩と呼んだわけではなかつたのだ。

彼自身がどうやって生きながらえたのか、驚かざるをえない。おそらく、自らの高い徳によつてなした偉業なのだろう。そして八日目に二人は息も絶え絶えある山の草原にたどり着いた。そこは四方に青々と草が茂り、清らかな水をたたえた川が流れ、たわわに実つた木が揺れ、ひっきりなしに鳥のさえずりが空にこだましていた。菩薩は女房に十分に水を飲ませ、たくさん果物を食べさせた。はつらつとして彼女が一本

の木の幹に寝そべり、何か山の歌を口ずさみ始めるのと、彼は水を浴びるために下を流れる川へ降りていった。女房も水を浴びたいと当然思わなければならぬはずだったが、思わなかつた。なぜかは知らない。だが確かなのは、菩薩が川に降りていくと、女房は、ああこの馬鹿がこんなに水浴び好きでなければいいのに、と考へていたことだ。このことから、菩薩と女房の精神的な距離や女房の自己中心的な性格について、多くではなくてもいくらか推察できる。

すると、兄貴が沐浴していた時に、手足を切り取られた一人の男が川の早瀬を流れるのが見えた。男を哀れに思い、彼は自らの疲労、若い女房が岸の上の木の下で寝て待っていること、自分はあまり泳げないこと、女房に自分の多くの血を飲ませ、肉を食べさせたために衰弱していることを忘れた。つまり、何もかも忘れて徳の高い男は手足を切り取られた男の命を助けようとしたのだった。そしてやつとのもので男をつかまえて川の外に連れだし、川岸に寝かせて

尋ねた。「誰がお前にこんなひどいことをしたのだ？」男は言った。「悪い奴らが俺の手足を切つて、川に放り込んだんだ。だけど、あんたが命がけて俺を助けてくれた。どうやって恩返しをしたらいいのかわからない。一生かかっても恩返しなんてできない。あんたはただの人じゃない、菩薩さまだ！」

それから、菩薩は男を背負つて女房が寝ている岸の上に連れて行つた。女房は彼らを見ると起き上がり、菩薩は男を下ろして地面に寝かせた。男は感謝の念で菩薩を見て、彼の女房を見た。男の視線が菩薩の女房に向くと、その美しい女の唇にかすかな微笑みが浮かんでいるかのように感じ、男は身震いした。菩薩は少し葉草を摘んできて、それを潰して膏薬を作つた。次に男の傷にその自然の膏薬を塗り始めた。女房は、夫が自分のために新しいおもちゃを作っているかのようにすべてを眺めていた。彼女の小さな微笑はその感情からもれたのかもしれない。それはともかく、菩薩が女房の覆っている

布を裂いて包帯をたくさん作り、男の傷口に巻きつけると、女房には着飾った乞食がいたずらにおどけているかのように見え始めたのは確かだった。

膏薬を塗り、包帯を巻いたのち、菩薩は男に十二分に食事をさせた。女房はすべてを見ていた。そして、もしやこの間抜けな亭主は男に自分の肉を食べさせ、血を飲ませるつもりじゃないかしらと考えていた。この思いがよぎるや、彼女は神秘的な微笑をたたえ、それに夫は気づく由もなかったが、男はもちろん気づいたのだろう。そうでなければ、その時彼がこれほどうつりするはずはなかった。

その後何日間も付きつきりで菩薩はその男の面倒を見つづけ、女房は二人の間に座つたり、寝そべつたりしながら様子を眺めて思いをめぐらしていた。ある時、山の歌を彼女が口ずさむと、男の先のない手足はまるで踊っているかのように思わず揺れ始めた。またある時、女房は歌を中断し、心の中でこう考えて悶々としてい

た。うちの亭主は自分のことやあたしのことは一向に構わないで、何もかも忘れて見ず知らずの男の看病にかかりきりじゃないの。何日間も歩き回つて苦労してやつと果物と水を手に入れて、このきれいな誰もいない場所を見つけたのに、この間抜けはあたしと楽しまないで、神像を磨き上げるみたいはこの男の身づくろいをしてやっている、と。彼女がこう考えている時、

地面に転がった男はその心の奥の苦しみが分かるかのように、彼女を見つめていた。そして哀れな菩薩は二人の心の動きに気づかず、二人に尽くすことだけに夢中で、暇があれば少し離れたところに立つバナヤン樹の下で愛憎を去つた苦行者のように座つた。女房が男を見る時には、男は身寄りのない身体の不自由な男ではなく、お話のヒーローのように微笑んでいるのだ。女房は男のその微笑にそそられた。その時彼女は、世間が菩薩と呼び尊敬する自分の夫が少し離れたところに立つ古いバナヤン樹の下で目を閉じて坐っていることを忘れた。その時彼女の

心はうつとりするような感覚に襲われてはまた消え、恋に一喜一憂するお話のヒロインのような感覚を覚えたのだ。こうして、菩薩は女房と男とともにその美しい場所ですら始めた。彼は花や果物を取ってきては、僧侶が女神像の前に供えるように女房の前に置いた。彼の眼は女房の眼を見ることもなく、手は彼女の身体に触れることもなく、頭には礼拝や花や果物以外に別の感情や物を女房が好むこともあるという考えがよぎることは決してなかった。一方女房は、世間が菩薩と呼び、

裕福な商人の長男であつた夫がいつか自らの鎧をはずし、恋人を見るような眼で自分を見てくれるのを待ちわびていたのだ。しかし菩薩はその願いにまったく気づかなかつた。

一方男は快活になり、それは奇妙な花が咲いたかのようにだつた。彼の手足が戻ることはなかったが、その切り株は普通の手足をもしのぐほどに器用になつた。彼は二人にあらゆる娯楽を提供することができた。彼の顔は輝き、微笑み

にはいたずらな表情が浮かんだ。菩薩の女房は男と話すようになり、彼のおしゃべりを楽しみ、彼の芸を見て笑いだした。男は手足を切って自分を川に投げ込んだ敵について語り、自分の苦痛を聞かせ、人にやさしい彼女の夫の長所を褒め、何がしかの方法で菩薩の女房を魅了した。いつも彼の話は新たな展開を見せたので、菩薩の女房は驚いて言った。——前はこんなことを言わなかったじゃないの！男はこの美しい女性が自分の話をこれほど熱心に聴いていることにうれしくなった。そして彼は最高の褒美をもらったかのように、満面に笑顔たたえるのだった。四つの切り株を上に向けて言った。——あなたみたいな美人が俺みたいなくだらん男のくだらん話を熱心に聞いてくれて、ありがどう。菩薩の女房は照れて言った。——もつと話して。男は、天女に一度も弾いたことのないメロディを奏でて欲しいとせがまれているかのような気がするのだった。

話術以外に、男は仕草でも菩薩の女房をとて

に安置されたことは一度もなかったと言え、男の像がそこに安置される必然性があつたとも、おそらく言うことはできない。

そしてある日、菩薩が花と果物を取りに行った時のことだった。男の登場とともに誰もが懸念していたことが起こってしまった。ここで事の詳細を語るつもりはない。菩薩の女房はこれほどの喜びを今まで味わったことがなかったと述べれば十分だろう。男について確かなことは何も言えない。この情事に対して菩薩の無関心と浮世離れた様子や、女房がそれに一層不満を持ちつづけたことも想像に難くない。性関係を結んだのち、男と菩薩の女房は互いに遠慮がなくなつただけでなく、その代わりに何とも言えない開放感に包まれたのだった。菩薩が献身や苦行に耽る一方で、女房と男は官能に溺れた。そこにいた蛇や鳥でさえこの出来事に驚いたが、菩薩はこれにまったく気づかなかつた。

このことは七日間つづいた。八日目菩薩の女房は血も凍りそうなことを突然思いつき、男と

も喜ばせた。菩薩といっしょにいるうちに、哀れな女は笑うことを忘れてしまつていた。(菩薩が何かの話や仕草で笑うのを誰も見たことがないことを、前もつて言っておくべきだった)男は切斷された足でよろけて見せて菩薩の女房を笑わせ、切られた手で音のならない拍手をしたり、器用な口から拍手のような音を出してみたりした。彼女は笑い、また驚いた。——どうやってしたの？と尋ねた。男は自分の手足の切り株を空に向け、お茶目な信者のような声を出して言った。——お天道さまのお慈悲で！すると彼女はどつと笑つた。そして男の右手の切り株を自分の両手でぎゅつと握ると、男の全身は振るえ上がった。菩薩の女房が微笑む時のように。

果たして、もはや女房は自分の夫についてほとんど考えなくなり、男を思うようになったのだった。もし彼女の心という寺を覗くことができれば、そこには菩薩像ではなくて男の像が安置されているのが見えただろう。菩薩像がそこ

ともに菩薩の権化のような夫を殺そうと策略を練つたのだった。暗くなるやいなや彼女は出産の際にも発しないようなうめき声を上げ始めた。夫は、男が川に溺れそうになつてゐるのを見た時と同様に、彼女のことを心配した。彼は尋ねた。

「急にどうしたのだ？前にもこんなことがあつたのか？」

女房は偽りのうめき声を上げながらやつとのことと言つた。

「ええ、一度あつたわ。あの時はお父さんが薬草を探してきてくれて、すぐに直つたけど。あの薬草は川の向こう岸にあつて、他のどこにもないのよ」

いつもどおりに菩薩はすぐさまその薬草を探しに行くべきだつたのに、その日はなぜか詰問を始めたのだった。

「お前の父親に誰がその薬草のことを教えたのだ？」

女房はまた偽りのうめき声を上げながら言つ

た。

「あたしよ！」

菩薩は尋ねた。

「だけど、誰がお前に教えたのだ？」

今度は女房も男も驚いた。菩薩さまは今日はどうしてこんなに質問攻めにするのだろう。もしや何か怪しんでいるのではないだろうか。しかし菩薩は何も疑っていなかった。哀れな菩薩は女房の気を紛らわすためにしゃべりつづけたのだ。女房は言った。

「夢で神さまが薬草のことと、それがどこにあるのか教えてくださったの」

きつと痛みが少し楽になったので、今度は少し落ち着いて話したのだろうと思ひ、菩薩はほつとした。そして男に言った。

「気を紛らわせてやってくれ。私はこれからその薬草を取りに行くから」

男は言った。

「心配するな。だけど、その場所は俺も知っているが、そこに行く方法はひとつしかないぞ」

菩薩は言った。

「分かっている」

それから彼は草と藁でできた丈夫そうな紐を拾ってその片端を木の幹に結ぶと、紐を掴んで岸に降り始めた。彼が少し下に降りたところで、女房は起き上がり、木の幹に結んだ紐をほどき始めた。彼女が紐をほどくを見て、痛いのに起き上がっておそらく紐をしつかり結ぼうとしているのだと夫は思った。そして紐がほどけるやいなや、彼は紐もろとも川へ、そして彼の女房は男の手のない腕の中にくずれ落ちた。しばらく二人は抱き合っていた。菩薩が助かるはずがないので安心していたのだ。なぜなら、落ちたら即死するくらいに高いところから彼は落ちたし、たとえ即死でなくても、川の早い流れが残りの仕事を引き継いでくれるはずだったからだ。

だが川の流れは、彼をある町の岸に打ち上げたのだ。彼は死ぬこともなく、傷ひとつ負わなかった。まさに前世に積んだ功德のお陰な

のだろう。そして、彼は岸のそばの菩提樹の下に行つて横になつた。しばらくじつと寝ながら、女房の悪行について考え、驚いた。不思議なことに、彼は男に対して疑いや怒りを覚えなかつた。実のところ、女房に対してもその時彼の心には、生じるべき、いや他の者なら生じると言うべきか、そうしたすさまじい怒りはおこらなかつた。世間が伊達に彼を菩薩と呼んだわけではないことを認めざるをえない。本来なら彼の心にくつもの疑問と疑念がいつきに生じてし

かるべきだった。——女房の悪行の真の理由が何だったのか？あの男は女房の昔の恋人ではなかつたのか？男はきつと女房をたぶらかしたのだろう。もしや私の知らぬ間に過ちを犯したので、私を殺そうと思つたのではないだろうか？これから二人は何をして、どこに住むつもりだろうか？私の妻はあの男に恋をしたのかもしれない。手足がないから妻はあの男が好きなのだろうか？きつと私にはあの男にない欠点があるのだろうか……。普通なら彼の心に復讐心が芽生え

てもしかるべきだったが、何もかも普通ではなかつた。それに菩薩のような人は普通の枠にあてはまるものではない。そしてしばらくすると、何もかも忘れて菩薩は善とやさしさ以外の何もない境地で再び瞑想に耽つたのだ。

偶然にも、その町の王がその日逝去され、慣習に従つて神聖な象が町に放たれた。象が誰かを抱き上げて自らの背に乗せ、その人が玉座に就くのを民衆は待っていた。象は長い間町の中を歩き回っていたが、誰の前でも鼻が震えることとはなかつた。皆が心配し、様々な推測をし、色んな選択肢を考え、象に何かあつたのではないかと言ひ合つた。まあ、人は得てしてこうするものなので、そんなことはどうでもいいので、物語を先に進めよう。

すると、その象は歩き回るうちに菩薩が寝ていた場所にたどり着いた。彼の匂をかぐと、鼻を鳴らし、象は彼を抱き上げて自分の背に乗せた。きつと、町にふさわしい王がみつかったと判断できるような輝きを菩薩の顔に見てとつた

か、彼の芳香に何かを嗅ぎとつたのだろう。可能性としては、疲れたので何も考えたり嗅いだりせずに、菩薩を抱き上げて背に乗せただけかもしれない。

こうして、世間が菩薩と敬い、女房がその命を奪おうとして失敗した商人の長男は、その町の王になった。玉座に就くと、彼は女性を遠ざけ、自分の新たな責務つまり町を治めることに専念しようと決心した。誰にも妻と男については語らなかつたし、言うべきことも思いつかなかつた。非暴力、慈愛、慈悲といった美德が彼のすべての行為の原動力だったので、民衆は王を賞賛してやまなかつた。

一方彼の女房と男は、菩薩が川で溺れ死んだと信じていたので、あの草原で安心しきつて情事に耽つた。もし二人がそこに暮らして人生を終えたなら、この物語を先に進めることはできないが、しばし穏やかな日々を過ごしたのち、菩薩の女房は落ち着かなくなつたのだつた。つまり彼女はその草原に嫌気がさし、町の賑わい

妬し、連れの女をいやらしい目で見た。女たちは男に同情し、その女に腹を立てた。それから、この女がこれほど惚れ込むのだから、この男にはきつと何か特別な力があるのだろうと思つた。子供たちは男を見て笑つたものの、いじめはしなかつた。つまり、手足のない男と菩薩の女房のカップルは人々に奇妙には映つても嫌がられはしなかつたのだ。人々は掌いっぱいに喜捨をし、菩薩の女房と男は大げさに彼らに感謝した。時には菩薩の女房が突然山の歌を歌い始めると、乞食女の声はどうしてこんなに甘美なのだろう！と聞いていたすべての者たちは思つたのだつた。また時には、男が背負われながら自分の切り株で芸を披露し、人々を笑わせた。こんな芸をどこで覚えたのだらうと人は驚いた。菩薩の女房は夫について何か思ひ出すこともなく、夢も見なかつた。あの立派な男はこの世からいなくなつたばかりか、あたしの心の中からも死んでしまつたのだわと彼女は思つた。男は時々罪悪感を覚えると、すべて前世の報いの結果だ

や都会の喧騒を欲し始めた。男は彼女に言つて聞かせた。——ここでは食物も水も不自由ないが、都会に行けば、俺たちは物乞いをするしかないぞ。俺は手足が不自由だから何も仕事はできないし、お前は健康で美人だから、俺はお前に仕事はさせない。不俱の男の女房が健康で美人だつたら、人はよこしまな目で見るんだぞ。言つとおりにしろ。ここを離れるなんてわがまを言うな。

男の話を聞いて、菩薩の女房は一層頑なになつた。彼女は恋人の言うことを無視して、大丈夫だと言ふのだつた。あたしは仕事はしないし、卑視にもあてられないわ。いつもあんたを背負つて町や村を歩くし、色んな漫談やお話を聞かせて人を楽しませるから、みんな喜んで布施をしてくれるでしょう、と。こうして菩薩の女房は意気揚々と恋人を背負つて町や村を歩き出したのだつた。人々は彼らを見て目を見張つた。健康で美しい女の背にしがみついた手足のない男は奇異な印象を与えたのだ。男たちは彼に嫉

と考へてそれを払拭し、こんな美しい女に背負われて世界中を旅できるなんて、自分は前世の功德の果報を得たのだと考へてうれしくなつた。そして流れ流れてついに二人は、彼らのことなど露知らず、菩薩が統治している町にやつて来たのだつた。そこに着くとすぐに、芝居などを見させて彼らは人々を魅了した。菩薩は立派な王で、民衆は彼の美德のお陰でとても幸せだったが、時々娯楽が欠けていることに不満も感じていた。いつか自分たちの町でもびつくりするような騒動や事故が勃発し、笑えるような見世物があり、みんなで議論できるような事件が起き、単調な人生に変化を生み出すような状況を欲していた。言うまでもないことだが、常に平穩で幸福でも人はそれを窮屈に思い、つかの間でいいから、変化のない日常に亀裂が入るような目新しいことが起こつて欲しいと心の中で望み始めるのだつた。

二人がその町に来たことで、突如その状況が生まれた。人々は初めての感情、つまり喜びの

感情を覚えたのだった。すべての者は心の中でこの奇妙なカップルについて様々な推測を始めた。二人の周囲にはいつも見物人や賞賛者が群がった。菩薩がこの町の王になつてから、町で盗難事件は起こったことがなく、一度も騒動や争いはなく、すべては何事も起こったことさえないという様子で、人は誰も間違ひなど犯したことはないというように大人しかった。そこで菩薩の女房が山の歌を聞かせると、人々の奥底で眠っていた怪しげな欲望が目覚め始めた。男が手足の切り株で上手に形を描き、振りを決めると、ああ、あんな切り株が欲しいと羨ましがる者もいた。二人の到来によつて、町は命を吹き返したかのようだった。

するとついに、一人の乞食女が愉快な不倶を背負つて町を歩き回り、民衆は一日中二人の芝居を見つづけ、二人の話題で持ちきりになるほど熱中しているという知らせが王の耳に届いた。菩薩はその二人を宮廷に寄こすように命じ、彼らが宮廷に上がると、久しく会わないうちに女

う。

その奇妙な笑いがやむと、菩薩は言った。

「私はお前に自分の肉を食わせ、血を飲ませると、お前は鬼女のように私の肉を食らい、血を飲みつづけた。なのにお前は私の女房では飽き足らず、この男の女になり、策略をめぐらして私を川に投げ入れた。だが、これだけは言つてくれ。お前はこいつを背負い物乞いをして、幸せそうにも見えるが、この男のどこがいいのだ？」

注目すべきは、菩薩が男を責めていないことだ。菩薩の問いが男に対する嫉妬から発せられている点は一考を要する。本来なら、菩薩は嫉妬やねたみを超越していなければならぬのだから。

菩薩の女房は夫の質問に何も答えなかつた。彼女はじつと彼を見て微笑みつづけた。あなたに分かりつこないわ。情欲に関わることはね。あなたは菩薩なのですから！と言っているかのようだった。

房はさらに魅力的になり、男はただの不思議な男にしか見えないほど元気になつていたが、王は一目見るなり誰だか分かつたのだった。一方菩薩の女房は、菩薩がさらに立派になり痩せたので、夫に気づかなかつた。

王は尋ねた。

「お前が夫思ひの美しい乞食女か。町中がお前とその手足を切られた男に熱狂しているそうだが」

菩薩の女房は答えた。

「そうでございます、王さま」

これを聞いて菩薩は、これまで一度も笑つたことがないかのように笑つた。実のところ、そのような凶暴な笑い方は彼の性格に反するものだった。もつとも、いかなる笑い方しても彼の性格に反してはいたが、重臣たちは王が笑うのを見て驚いた。彼のこの姿が不気味だったので、怯える者さえいた。怯えた者の中には、手足を切られたあの男がいた。男はいったいどうやつて王を菩薩だと見抜くことができたのだから

大臣たちは女の生意気な微笑みに腹を立て、

その場で彼女の鼻と耳を切り落とさせ、二人を町から追い出した。

驚くべきことに、菩薩でもある王は自分の大臣たちを止めもせず、罰しなかつたのだ。

こうして天の裁きが下つたと言える。

いや、こうも言えるだろう。菩薩は実のところ菩薩ではなかつた。だが彼の女房は、最後まで愛の道を貫き、手足のない恋人を背負つて町から町へと放浪し、物乞いをして、山の歌を歌いつづけた。そして鼻と耳がなくても、彼女はとても美しかった。

作者注記：『カター・サリット・サーガラ』でゴームカという座頭からこの物語は語られるのだが、最後に彼が、女の心は嫌悪感にあふれ、それを理解するのは容易ではなく、彼女は常に感官に支配され、善良な男はいつも善行の果報を得るのだとどうしても結論づけなければならぬ

いと考えたことに、失望と驚きを覚えざるをえない。ゴームカの結論が不自然に感じられるように、この物語に変更を加え示唆を散りばめたことを認めるのにやぶさかでない。私はあえて結論を出さなかった。

〈解説〉クリシュナ・バルデーオ・ヴァイド
(Kṛṣṇa Baladeva Vaidā, 1927-) 現パキスタン

領パンジャブに生まれ、英領インドの分離独立によって、難民としてインド側に避難。ハーバード大学で英文学の博士号を取得し、アメリカの大学で教鞭をとりながら、ヒンディー語で小説を発表し始める。その後インドに帰国し、精力的に創作活動が続けるが、ヒンディー文学の伝統に縛られない自由な作風は常に賛否両論を巻き起こし、異色のヒンディー作家ととらえられている。現在、夫人とともにデリー在住。

本編は、短編集『菩薩の女房 *Bodhisatva ki Bivi*』(2001)の表題作の翻訳である。なお、本作品の基になった『カタール・サリット・サーガラ』の原作は、原実著「古代インドの女性観(3)」、『国際仏教学大学院大学研究紀要 8』(2004) pp. 32-36 に翻訳紹介されている。